



TITLE:

学生の声

AUTHOR(S):

CITATION:

学生の声. Cue 2001, 7: 52-52

ISSUE DATE:

2001-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/57818>

RIGHT:

学生の声**「進学？」**

電気工学専攻 奥村研究室 博士後期課程1年 米 本 明 弘

学部に入學した頃、大学に入った目的を聞かれると、より高給の大企業に就職するため、などと答えていました。とはいっても、それは卒業証明書のためと言うよりは、数学と電子回路の設計を身に付けることを考えていたと思います。企業に就職する心づもりはそのままM1の3月まで何を考えることもなく一貫していたのですが、友人が博士課程に進むと言うのを聞いたり、就職活動の雰囲気にもまれたりしながら進路希望用紙の提出期限3分前まで悩んだ結果、今はこんな文を書いています。

僕は普段から優柔不断で、しかも就職しようとずっと考えていたわけなので、今回の選択は自分にとって大きなもので、また人生に関わるだろう初めての選択でした。最終的に決定のポイントになったのは、自分の興味と周りの環境です。例えばwebや雑誌などで面白い技術を聞いたりすると、どうしてもその仕組みが気になりますが、そのときに元の論文や本がすぐに見つかるとか、あるいは周りの人もそれを面白いと思ってくれて、いろいろ議論ができる。また、周りの人から面白い話を聞かせてもらえる。自分のこれまでのIT系アルバイト経験から見ても、この自分の興味の方向性は大学よりの気がしたのです。

こうして、どちらかと言うと勉強しようと思って進学したので、研究することに対してはより一層プレッシャーを感じます。現在は数値ラプラス変換の改良に取り組んでいますが、調べてみると、1970年台までにさまざまな積分法が提案されている一方で、最近では戸田分子でラプラス変換を計算するアルゴリズムが発見されています。そういう文献をふんふんと思いながら読んでいると、その興味深さとは裏腹に、ますます焦りを感じずにはいられない今日この頃です。

「博士課程に進学して」

情報学研究科 知能情報学専攻 松山研究室 博士後期課程1年 川 嶋 宏 彰

鳴川の桜が咲くのをみるのも7度目となり、引越しの多かった二十数年間からみれば、6年間という比較的長い間京都に住んでいることを改めて感じるとともに、あっという間に過ぎ去ったこの数年間を思い起こしました。もともと太陽光発電に興味があって電気系を選んだのですが、3回生の終わりに、人間の行っているような情報処理の原理に興味をもち、カメラとコンピュータを用いて人物の追跡や動作認識の研究を行っていた現在の研究室に入ることを決めました。その後、修士課程修了後には就職も考え、実際にほとんど決まっていたのですが、悩んだ末博士課程への進学を決意しました。その理由の一つは、ゆっくりと一つのことを考える時間が与えられることであり、就職をした友人たちの話を聞いても、その点に関してはいかに恵まれた環境にいるかを感じずにはいられません。たとえ就職しても大学に戻ってくる道もあるだろうし、現場で働いてみたいという気持ちもありましたが、いずれにせよ研究職につきたいという気持ちが強く、進学して博士号を目指すことにしました。

経済的な問題や将来の進路、自分の能力などで不安を感じることはたびたびありますが、これら不安はどんな道を選んで歩いても避けることはできないはずです。このような不安に対する処方箋は、自分のアイデアを次々と形にし、指導教官や他の研究者に伝えて批判やコメントを受けることであると思います。これが結果的に自信につながるはずです。研究に関してはまだまだ周りが見えていないと思いますが、7回転んでも8回起き上がるような、“active”かつ“creative”な姿勢で研究に取り組むとともに、21世紀はじめの博士課程進学者として、大学にいる間に少しでも社会に貢献できる研究成果をあげられればと望んでいます。